

毛賀御射山遺跡

1978.3

**株式会社 長野中央市場
長野県飯田市教育委員会**

毛賀御射山遺跡

1978.3

序

丸一では飯田、伊那両地区への一般食品の安定供給をはかるべく飯田市に食品供給のためのデポを設置する計画をもちましたが、それにつきまして飯田市及び土地所有者ならびに地元関係者各位の全面的な御協力を得て飯田市毛賀区に食品の倉庫を建設する運びとなりました。

かねてよりこの地籍は文化財保護地域に指定されておりまして、弊社といたしましても文化財保護の見地から工事実施に先だち飯田市教育委員会に当地の発掘調査をお願いいたしました。

今回の調査によって予想以上に多くの成果が得られましたが、なかでも当地、伊那谷中位段丘上に平安時代の住居址と建物址。計16ヶ所が発見され、また布目瓦が多数出土された事はこの地が寺院であったことを示すものと思われ非常に興味深い事であります。

報告書が出版されるに当たり改めて文化財保護の意義を深くかみしめるとともに、この発掘調査にあたられました日本考古学協会員佐藤調査団長や飯田市教育委員会山下課長補佐はじめ関係各位の御努力に厚く御礼申し上げます。

昭和53年3月

株式会社 長野中央市場

代表取締役 仁科 恵敏

目 次

序	3
目次・例言	4
I 環 境	5
1. 自然的環境	5
2. 歴史的環境	5
II 発掘調査経過	10
III 調 査 結 果	12
1. 銭文時代中期住居址	12
2. 平安時代住居址	14
3. 平安時代建物址	19
4. 中世住居址	23
5. 土 坡	24
6. その他遺構外遺物	27
IV 考 察	28
調査組織	30
おわりに	31
遺 物 図	32
図 版	36

例 言

1. 本書は昭和51年、丸一長野中央市場飯田支店流通センター建設に伴う御射山追跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の編集・執筆は佐藤が担当した。
3. 遺構・遺物の作図、写真は佐藤が担当し、製図は遺構を中平一夫、遺物を田口さなゑに労をわづらわした。
4. 遺構実測図のうちピット内、または横に記してある数字は床面からの深さをcmであらわし、縮尺は図示してある。
5. 遺物は飯田市考古資料館に保管してある。

I 環 境

1. 自然的環境

御射山遺跡は長野県飯田市毛賀に所在する。毛賀は飯田市合併前は旧松尾村毛賀で、現在も大きさは松尾地区に含まれており、飯田市街中心部より南3kmの距離にあり、飯田盆地のほぼ中央部に松尾地区は当っている。

飯田盆地は東に赤石山脈、西に木曾山脈が連なる、この中間を天竜川が南流し、その両岸に見事な河岸段丘が発達している。松尾地区は天竜川西岸にあって天竜川より幾段もの段丘があって次第に西方に高まっている地形である。

遺跡のある御射山は伊那谷中位段丘の第6段丘面にあって標高443.8m、天竜川との比高65mを測る。遺跡の西は高さ40mの段丘崖があって上位の南ノ原面となる。伊那谷第3段丘面にあって松尾地区では最も高い段丘面である。ここには三菱電機飯田工場があり、その北には飯田女子短期大学がある、広い段丘面を形成している。さらに西方は最高位の鼎町名子熊面があり、木曾山脈から続く扇状地が西に広がっている。

遺跡の東は高さ30mの段丘崖があって毛賀駅跡社面となり、さらに小さな段丘面があって沖積上位段丘の緑ヶ丘中学のある下毛賀面となり、下位の沖積段丘の清水面となって天竜川に接し、そこは標高386～390m、天竜川との比高5mを測る。天竜川の東岸の飯田市下久堅地区は天竜川の支流の小河川による浸蝕で切られ、豊丘村・喬木村と続いている見事な段丘地形はなくなり、小段丘を残して、大部分が傾斜地形をなして、赤石山脈の前山である伊那山脈の麓に続いている。

御射山は南北150m、東西150mの小段丘面にあり、南ノ原への道路をはさんで、北は御射山、南側は浜井場地籍となり、そこに飯田三協工場がある。台地の南は高さ30mの深い毛賀沢川の浸蝕谷となり、この谷を距てて南は飯田市駄科北平となる。北は南ノ原の段丘崖が緩い傾斜をなして下がり、ここは桑園や梅畠となって、下段面にいたっている。東の段丘崖下に旧遠州街道（現国道151号は東300mをとおって）の道筋が通っており、この街道に沿って人家が並んでいる。

御射山面の微地形をみると、西の段丘崖下は上部より押出の深い堆積をなし、一段高い地形を形成し、そこに御射山社と小木曾一統の氏神が祀られており、この西を南ノ原への広い道路が開かれている。ここより一段下がった平坦面が遺跡で、東の段丘端部が高く、西の段丘崖下に近づくに従い低くなり、比高差70cmを測る。北東から南西へ毛賀沢川の支流北の沢の崖端浸蝕部へと緩い傾斜をもっている。このため東側は高燥であり、西側は雨が降れば水が溜まる状態である。かつて南ノ原段丘崖下には豊かな湧水があったが、工場建設、道路の開設等によって湧水はみられなくなっている。

2. 歴史的環境

松尾地区の段丘上には多くの遺跡が分布しており、また南に隣接する竜丘地区の遺跡も多く、また、ともに飯田下伊那地方では古墳密度の最も高い地域で松尾地区で65基（前方後円墳8）竜丘地区で138基（前方後円墳9）を有している。



遺跡
松尾 1.夢前 2.兎向 3.鳥塚場 4.寺所集会所付近 5.明公民館分館付近 6.八幡原 7.代田獅子

堤付近 8.南水場会所付近 9.照月寺付近 10.石打場 11.夢上 12.浜井場 14.大垣外 15.緑ヶ丘中 16.坂越 17.田畠

毛賀 18.田園 19.毛賀堀削 20.南ノ原

駿科 21.北平 22.塙越 23.安宅 24.櫻現堂 25.宮城 26.大島 27.城跡

下久堅 28.北原上ノ平 29.竹ノ下 30.番場 31.司馬塙 32.篠敷 33.のいわ 34.主膳 35.内御室 36.馬出し

37.坂下 38.五輪原 39.川原 40.京田

古墳
松尾 A.御射山獅子塚 B.おかん塚 C.上廣天神塚 D.姫塙 E.羽場獅子塚 F.夢前大塚 G.坊主塚

毛賀 H.水城獅子塚 I.八幡山古墳 J.代田山狐塚 K.代田獅子塚

駿科 L.照月庵古墳 M.戦争塚 N.平塚 O.塙越古墳 P.安宅古墳 Q.櫻現堂一号塚 R.番匠塚

下久堅 S.塙越古墳 T.塙平古墳

図1 御射山遺跡地形図及び周辺遺跡図 (1 : 25,000)



図2 御射山遺跡地形詳細図 (1 : 5,000)

松尾地区での発掘調査例は少ないが、それら遺跡がいずれも主要な遺跡であることがわかっている。御射山の上段面にある南ノ原遺跡では昭和47、49年の三菱電機飯田工場建設に伴う調査で中世小笠原氏の重要な家臣団の居が構えられたとみる屋敷跡、薬研堀、柵列等が調査され、完形の茶臼、天目茶碗をはじめ中世陶器片、内耳土器、青磁皿、鉄器類の出土をみ、縄文、弥生時代の石器も検出されている。

御射山のすぐ南に隣接する浜井場遺跡は未調査のまま飯田三協工場は建設されたが、ここは縄文時代の土器、石器の出土をみており、弥生中期土器の出土をみた注目すべき遺跡があった。現在南約3分の1が桑園や果樹園となって残っている。

御射山の段丘底にある毛賀神社面の上毛賀には石打場、照月寺付近、明上等の遺跡があり、縄文中期から弥生・古墳・平安時代にいたる遺物の出土をみており、特に石打場遺跡ではかつて小規模な調査が行なわれ、遺構は発見できなかったが、縄文中・後・晩期の土器があり、特に晩期土器は四角形の口縁をもっている。打石斧、小形磨製石斧、石劍、石棒、臼形耳飾、スタンプ状耳栓が出土しており、やや離れた地点から綠釉陶片が発見されている。大垣外遺跡では昭和42年、農業構造改善事業の際、その一部を発掘調査し、多くの須恵器を発見しているが遺構については明らかにされなかった。

下毛賀面の大部分は、緑ヶ丘中学建設や、農業構造改善事業によって、十分な調査が行われないまま遺跡は破壊されている。緑ヶ丘中学では縄文中期の土器が工事中発見されている。塚越遺跡ではかつて阿島式土器、石棒の出土をみたところであるが、昭和41年農業構造改善事業の際、縄文後期土器、石鎧、環状石斧、弥生中・後期土器、多量の古墳時代から平安期の土師器・須恵器の出土をみ、田甫遺跡でも多くの遺物が発見されたが、ブルトーザーの跡を追うような調査に終っている。下毛賀段丘面の南端にある田甫遺跡では縄文時代から弥生時代の石器類から古墳・平安時代の土師器須恵器の出土をみている。下毛賀面は一連の遺跡とみる同一段丘面上にあり、縄文時代から弥生中・後期、古墳時代、平安時代にわたる大遺跡である。消滅した古墳は多く、現在照月庵古墳、戦争塚が墳丘を残しているのみである。下段面の天竜川に接する最下位段丘面にある清水遺跡は昭和49、50年の天竜川護岸と国道152号付替に伴う調査では、弥生後期の集落と方形周溝墓10基、古墳時代では前・中期の集落とその期の多量の土師器の出土をみており、平安時代の集落と多くの好資料が発見され、中世の資料も多く出土し、大遺跡であることがわかった清水遺跡の北に続く明地籍は未調査区であるが、地形的にみて主要な遺跡と予想される。その北にある寺所遺跡は弥生中期初頭の寺所式土器の標準遺跡で知られ、2次にわたる小規模の調査が行われ、弥生・古墳・平安時代にわたる集落の存在が推定されている。

松尾地区的北端を流れる飯田松川に接し、沖積段丘面にある妙前遺跡は縄文中期、弥生中・後期から古墳・平安時代の各期にわたる遺物が多く表採されており、ここに妙前古墳群があり、現存古墳7基がある。⁽³⁾ 3号墳(大塚)は昭和46年発掘調査で眉庇付背、大刀、劍、鐵鎌、施、ノミ、鐵斧、玉類の出土をみ、現時点では飯田下伊那地方最古の古墳であろうと推定されている。

毛賀から北の代田では獅子塚付近で縄文土器、打石斧、磨石斧、石棒、土師器高窓の出土をみているがそれより北に続く城、水城、八幡、久井、上溝地域を含め遺跡は少なく、未調査区域が多い。しかし、この地域には古墳は多く、上位段丘面をいれ松尾地区前方後円墳の8基がここにある。御射山獅子塚・上溝天神塚・姫塚・水城獅子塚・代田獅子塚は墳丘をそのまま残しておらず、おかん塚・羽場塚・代田山孤塚は前方部を失って後円部だけが残っている。円墳では八幡山古墳が墳丘を保っている。

御射山遺跡の上段面南ノ原遺跡に続く八幡原は広い段丘面が鼎町にわたって広がっており、ここでは打石斧、土師器の出土をみており、矢高原では平安時代・中世陶片の相当量の表採があり、これら時期の主要な遺跡とみられている。なお上段の名古熊面には10数余の包蔵地が確認されているが未調査が多い。

竜丘地区的遺跡調査数は多く、毛賀沢川の対岸の駄野北平遺跡は昭和50年農業改善事業に伴う調査では

縄文中期加曾利E期の住居址²と平安時代の集落、中世の堂址を中心とした遺構群が発掘され、多くの資料を得ている。駄科区の南を境する新川に面す段丘端部に安宅遺跡があり、昭和43年国道151号付替工事に伴う調査で弥生後期・古墳時代末から平安時代の集落が発掘され、多くの資料を得ており、また大島・川崎遺跡では中世の遺構が検出されている。新川の南の桐林面では内山・花ノ木遺跡では古墳時代から平安時代の集落の存在が確かめられた。⁽⁵⁾

他の竜丘地区の農業構造改善事業に伴う調査で、昭和48年度には駄科宮城遺跡では縄文中期勝坂期の住居址とそれに伴う好資料が得られており、神送塚と付近古墳調査では、消滅古墳3基の位置が確認され、神送塚の埋替えられた多くの副葬品が発見されている。桐林下段面の小池遺跡では弥生最終末の住居址とその土器が検出され、飯田地方のこの期を究明する貴重な資料となっており、古墳時代末から平安時代の集落が調査されている。昭和49年度には桐林面の前の原遺跡では、縄文中期末・古墳時代後期、平安時代から中世にいたる多くの遺構・遺物が発見され、これら時期の集落の存在が確かめられている。⁽⁶⁾

竜丘地区の主な古墳には駄科では前方後円墳に権現堂1号、塚越1号古墳が現存し、円墳では飯田地方第2の規模をもつ番塚がある。桐林面では前方後円墳で飯田地方最古とみられる兼滑塚、丸山・大塚があり、桐林面の南西の塚原古墳群は前方後円墳二子塚を盟主に塚原3号・鏡塚・鎧塚・黄金塚があり、これより一段低位に金山二子塚を主座とする金山古墳群が続く。上川路には馬背塚・御猿堂古墳の県指定の前方後円墳がある。

前林には奈良時代に比定される古瓦・瓦塔破片の出土した「前林廃寺跡」があり、宮洞よりは傳仏の出土、開善寺境内より奈良時代前の古瓦の出土をみている。宮洞、堤洞、小白井、河内洞には平安期の窯址群があり、また伊賀良地区三日市場には土器洞（かわらけばら）の窯址がある。

古代東山道の育良駅址は上段面の飯田市殿岡の説があるが、それについて未だ明らかにされていない。また東山道の道筋が竜丘・松尾の古墳群地帯の最も早く開けた下段面地域を想定する説もあるが、いずれにしても今後の課題である。平安時代における下伊那の郷には和名抄に輔衆・伴野・麻績があり、伴野は竜東一帯とみられ、麻績は座光寺を中心とした飯田松川以北竜西の地とされているが、飯田松川以南の竜西地区についての郷は明らかでなく、輔衆（フス・オームラ？）についての地名は不明であるが竜西南部の地域とみられている。この地域には平安期創建とされる飯田市久米光明寺は、仏像の墨書き銘に保延6年（1140）とあり、重要文化財に指定されている。飯田立石立石寺の十一面觀音像は重要美術品になっている。

伊賀良の庄は飯田松川以南、阿智川以北の竜西一帯とみられ、北条氏一門江馬氏が地頭であり、その創建とみられる開禪寺（後に開善寺）、島田八幡宮（現鷲ヶ嶺八幡宮）があり、八幡宮神像銘には建仁3年（1203）より造立をはじめたとある。開善寺には鎌倉末とみる山門があって、ともに重要文化財となっている。八幡宮の東の城には豪族居館址があり、北条江馬氏の居館址ともみられているが推定の域をでない。

北条氏滅亡後信濃守護職となった小笠原氏により南ノ原の南端部に松尾城を、毛賀沢川を隔てた南に鈴岡城が築かれ中世末にいたっている。天竜川の対岸には知久氏の居館址知久平城跡があり、南原文永寺の五輪塔は、弘安6年（1283）知久教幸造立の銘文があり重要文化財に指定されている。

注1 佐藤 「松尾南ノ原遺跡発掘調査概報」 飯田市教委 1975

2 佐藤 「清水遺跡」 " 1977

3 大沢和夫・佐藤 「妙前大塚（3号）古墳」 " 1973

4 佐藤 「駄科北平遺跡」 " 1976

5 大沢和夫・佐藤 「安宅・大島」長野県飯田建設事務所 1969

注 6	大沢和夫・佐藤 「安宅・大島」	長野県飯田建設事務所	1 9 6 9
7	大沢和夫・述那藤麻呂他 「内山・花ノ木発掘調査報告書」	飯田市教委	1 9 6 8
8	述那藤麻呂・佐藤 「小池・宮城・神送塚」	"	1 9 7 4
9	" "	"	"
10	佐藤他 「前の原・塙原」	"	1 9 7 5
11	市村成人 「下伊那史第四卷」		昭 3 6

II 発掘調査経過

御射山遺跡は縄文中・後期土器、打石斧、石錐、平安時代の土師器、須恵器等の破片が表採され、隣接する浜井場遺跡とともに注意されていたところである。しかし浜井場遺跡は未調査のまま遺跡の3分の2は飯田三協工場建設のため破壊されてしまっている。昭和51年丸一長野中央市場飯田支店流通センターが建設されることになり、このため丸一長野中央市場と飯田市教育委員会との協議により、工事前に発掘調査をなし、記録保存することになったのが今次発掘調査である。

発掘調査は昭和51年5月28日より6月27日まで24日間、 $2,000 \text{ m}^2$ の調査を行ない、その後遺物の整理を終えたが、他遺跡の調査のため、52年10月になってようやく報告書の作成にとりかかったものである。

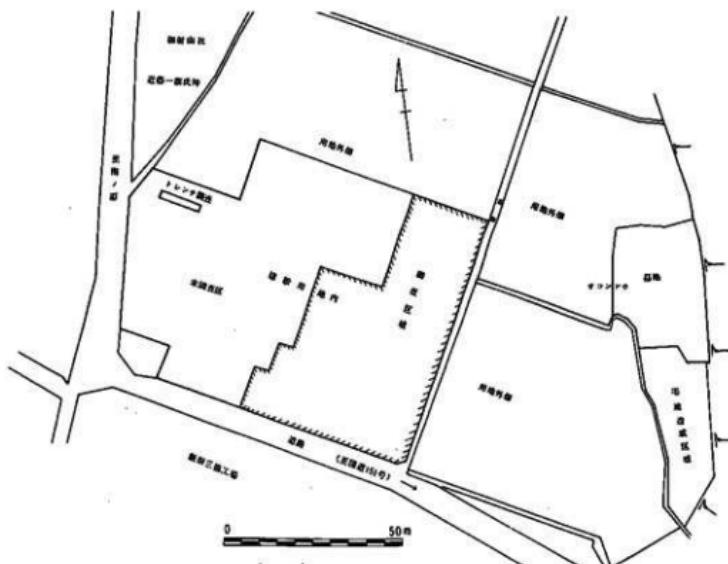


図3 丸一長野中央市場飯田支店流通センター建設用地図

調査日誌

- 5月4日（くもり、小雨） 飯田市商工観光課、教育委員会と現地で打合せをする。
- 5月17日（晴） 佐藤・今村現地の下見。調査重点地域とテント設定地を決める。
- 5月24日（くもり、雨） 丸一南信支社、飯田市商工観光課、教育委員会と発掘調査について話し合い、準備にかかる。
- 5月28日（晴） 器材運搬、テント張り、グリッド設定にかかる。グリッドは南ノ原への道路に沿って東からa、b……、東境界の道に沿って南から北へ1、2……とし、2m×2mを設定する。
- 5月29日（晴、くもり） グリッド設定、調査にかかる。a7に堅い床面、f13に土塙とみる落ちこみをみる。
- 5月30日（雨） 日曜日休み
- 5月31日（くもり、晴） a・b13を中心炉址を発見、1号住居址を検出し調査。f7を中心に土塙群とみられるを検出し、拡張調査。f13に土塙1号を発見調査する。
- 6月1日（晴） 1号住居址（縄文中期末）を完掘、測量。f7は2号住居址となり、掘り上げ測量。1号土塙完掘、測量。
- 6月2日（晴、くもり、にわか雨） ブルトーザーで表土、桑株の排除をなす。3号住居址（平安）を検出、布目瓦の出土をみる。2号・3号住居址の各北に柱列を認め調査。
- 6月3日（晴） 建物址Iを検出、掘り上げ、測量をなす。3号住居址の調査、平安期の須恵器、土師器、布目瓦の出土をみる。4号住居址を検出、調査、平安期の土器、布目瓦出土。
- 6月4日（晴、くもり） 3号住居址の調査、遺物多し。4号住居址掘り上げ、測量をなす。建物址IIを検出する。
- 6月5日（雨） 休み
- 6月6日（晴） 3号住居址掘り上げ。
- 6月7日（晴） 建物址IIを掘り上げ、3号址を測量する。5号住居址を検出調査。布目瓦の出土を見る。建物址IIIを検出調査。軒丸瓦出土する。
- 6月8日（くもり、朝にわか雨） 建物址III、5号住居址掘り上げ、5号住居址の中央より北寄りに大きな落ちこみあり、後に調査することにする。6号住居址を検出、調査。
- 6月9日（雨） 土器整理。
- 6月10日（くもり、時々雨） 6号・7号住居址を検出。5号住居址、建物址IIIの測量。
- 6月11日（雨） 休み
- 6月12日（くもり、雨） 建物址IV・Vとみるを認め、その一帯の排土作業。
- 6月13日（くもり） 建物址IVを検出。調査掘り上げ。灰釉陶片の出土のみ。6号住居址調査。
- 6月14日（くもり、後にわか雨） 6号住居址の周辺に柱穴を検出、掘り上げる。建物址V・VIを検出する。盛土をブルトーザーで排土。
- 6月15日（晴） 7号住居址の調査、掘り上げ。布目瓦の出土をみる。建物址V・VIの調査。布目瓦出土。6号住居址、7号住居址、建物址IVの測量。
- 6月16日（晴） 建物址V・VI掘り上げ。建物址VIを検出、調査。テント移動。
- 6月17日（晴、くもり） 建物址VIを掘り上げ測量。柱列址とみるを検出する。
- 6月18日（くもり） 建物址VIとみる一帯の排土作業。用地東にある宅地造成地の調査にかかるが、ここはかつて毛質の瓦屋の土採場となった所であり、荒らされている。

- 6月19日（くもり一時雨） 建物址Ⅳ・IXを検出、掘り上げる。南の道路側にグリッド設定調査にかかる。
- 6月20日（くもり） 日曜日休み。
- 6月21日（くもり） 8号住居址検出調査。土塙3号を検出、掘り上げ。建物址Ⅳ・IX、土塙3号の測量、3号・4号住居址カマドの調査、断面図をとる。
- 6月22日（雨、くもり） 建物址Ⅲの再調査、粘土の張り部が発見され、軒丸瓦の出土をみる。
- 6月23日（晴、暑い） 建物址Ⅲの粘土部の断面調査。8号住居址掘り上げ。9号住居址を検出する。
- 6月24日、25日（大雨） 作業不能
- 6月26日（くもり） 8号、9号住居址の排水作業、測量。5号住居址中央部の黒土の落ちこみ部の調査。軒丸瓦をはじめ瓦片の出土多し。土塙4号・5号を検出掘り上げ、測量。
- 6月27日（晴） 5号住居址、建物址Ⅲの調査、測量。未調査部の調査をなし、現場での調査を終わる。テント、器材を撤収する。

現場調査終了後遺物の整理をなし、52年10月になって報告書の作成にとりかかる。

III 調　　査　　結　　果

御射山遺跡で発掘調査した遺構は次のようである。（図4）

縄文時代中期住居址	1
平安時代住居址	7
平安時代掘立建物址	9
中世住居址	1
土塙	5

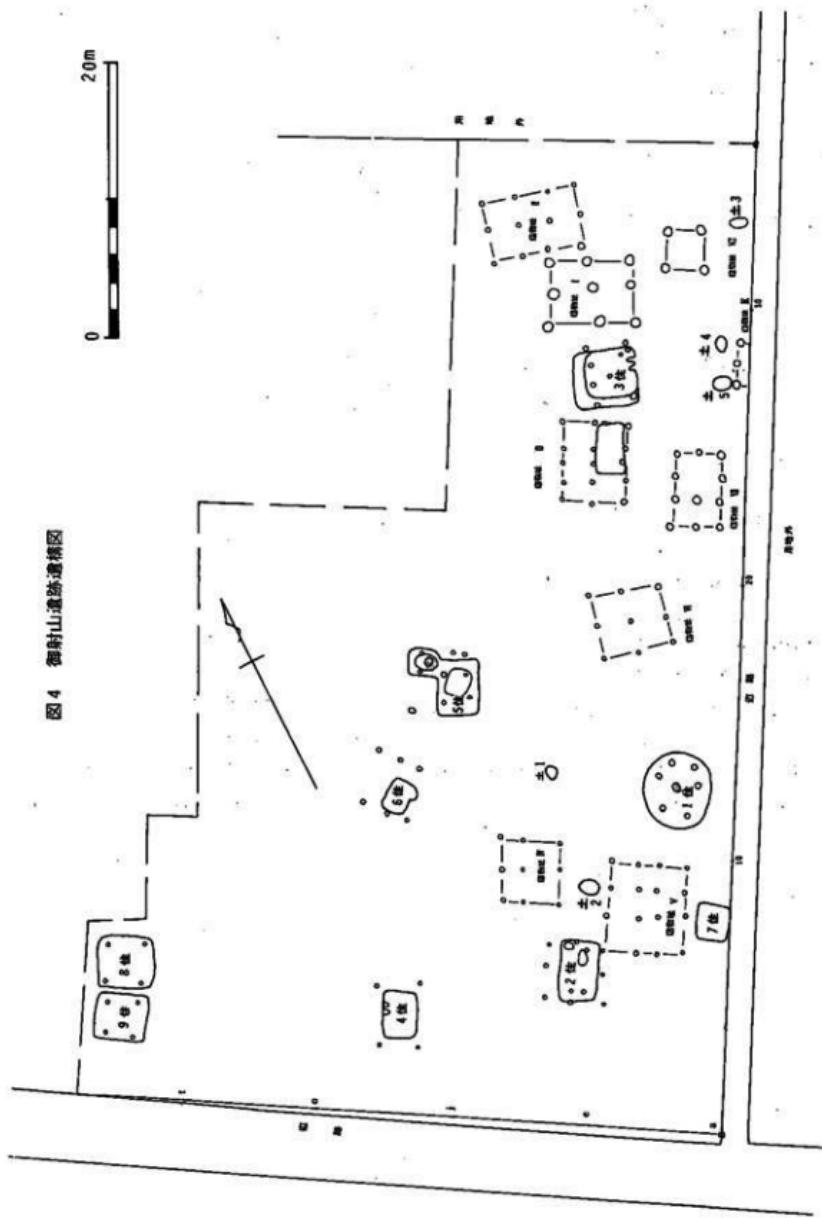
遺構は用地内の東側に集中し、西側はやや低い地形のため雨が降れば水が溜る状態のため遺構はなくなり、トレンチ調査でも遺構の発見はなかった。用地外の東側の畑には表面採集の遺物は多く、御射山台地東側に遺構群はあるものと推定される。台地東端部の宅地造成区域はかつて瓦土の採集場となった所で、すでに遺構は破壊されていた。

1. 縄文中期住居址

1号住居址（図5）

C12グリッドに炉址が発見されたもので、壁は削りとられてなく、推定径5m前後の円形の竪穴住居址とみる。炉址は中央よりやや西に寄ってあり、大形の掘りこみである。主柱穴は6孔をもつ。耕作によつて床面は荒れ、部分的に堅い面を残す。遺物（図25の1～6）は僅少で炉址より打石斧2件と加曾利E式

圖4 御射山遺跡遺構圖



の古い時期とみる土器1点を検出したにすぎない。住居址の形態からみて縄文中期末の住居址とみられる。周辺よりは打石斧数点が表土中より発見され、耕作によって掘り出されたものと見受けられる。

2 平安時代住居址

2号住居址(図6)

用地内の南東側に発見され、内側に南北4.1m、東西は南側で2.6m、北側で3mの隅丸長方形の5cm前後と深い豊穴をもち、その周間に2間×2間の柱穴列をもつ。豊穴内部には北隅に半円を石で囲む円形の貯蔵穴とも

みられるピットがあり、

中央より北に寄って梢円形のマウンドをもつが焼土はみられない。中世の住居址ともその形態からみられたが、遺物は平安時代の須恵器、土師器と布目瓦の小片があり、他の平安時代I群の遺構と同方向を示し同時期の住居址とみたものである。

3号住居址(図7)

北に建物址I、南に建物址IIがあり隣接しあっている。南北4m×東西4.7mの隅丸方形の豊穴住居址である。内側には北と東の壁と同じにする南北3.4m×東西3.9mの豊穴があり、4つの柱穴をもって二重構造をなしており、拡張の行なわれた住居址とみる。主柱穴は4つとみるが3つは壁に沿い1つは北のテラス上にある。カマドは東壁に中央より北に寄ってあり、粘土カマドである。住居址の中央部は緩い傾斜の浅い掘込みとなり、中央部に地床炉ともみる焼土をもつ掘りこみがある。

遺物(図21)は多く、土師器と須恵器が主体をなし、灰釉陶器と布目瓦がある。須恵器には壺と杯があり、1の壺は胎土・焼成は良く、胴部にタタキ目が施される。杯(3~11)は高台の付く3~6があり、他は平底である。杯蓋に2が、12は底部に孔を穿つて何かの蓋に使用したものとみられる。胎土に長石粒を多く含み仕上りの良くない地方窯産と、胎土、仕上りの良い美濃地方窯産があり、また、生焼けの10~11は一見土師器とみられるものがある。8の底部には糸切を切る1本の刻印が付けられている。

土師器は国分式で壺・鉢・杯がある。壺(13~17)と鉢(18)は横状窓による整形が施されているが、

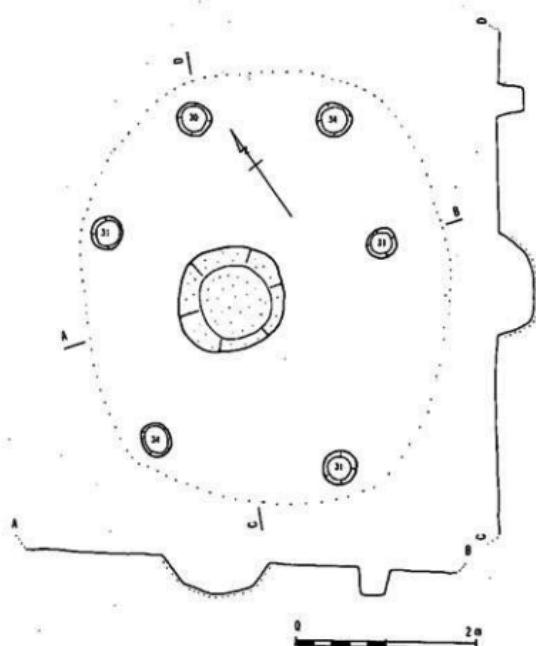


図5 御射山遺跡1号住居址

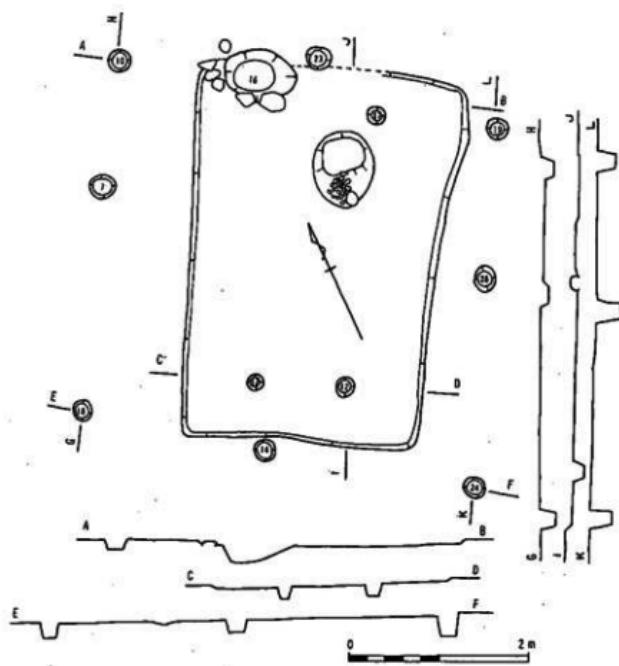


図6 御射山遺跡2号住居址

瓦に24~26があり、24は瓦とみるより瓦塔の一部かともみられる。25・26は布目瓦で、25は丸瓦、26は平瓦であり、カマドに付いて出土している。

4号住居址(図8)

調査区域の南側に発見され、他の遺構とは離れている。南北3.2m×東西2.5mの隅丸方形をなす竪穴住居址であるが、各隅から外に80cm前後離れて柱穴をもっており、住居址の大きさは4.5m×3~3.2mとなる。床面は堅く、カマドは西壁の中央より北に片寄ってあり、瓦片が挿入されていた。

遺物(図22の1~5)須恵器と瓦片の出土をみている。須恵器には1~3の杯があり、1は箝削り底、2は平底で口縁部は緩くの字状に外反し、盤といえるものである。3は高台付で胎土に僅か長石を含むが、いずれも焼成、仕上がりは良く美濃地方窯産とみられる。瓦片に4・5があり、布目をもつ平瓦である。これらの他に須恵器、瓦の小片数点の出土をみている。

5号住居址(図9)

調査区域のはば中央部にあり、南北4m×東西3.1mの竪穴と、その北西に張出しとなる南北2m×東西2.2mの竪穴によって構成される隅丸方形の住居址である。住居址の主柱穴は4つみられ、北のテラスに2つと張出し部内に2つの柱穴がある。張出し部内は大きな掘りこみとなり、その東側は炉址状にさ

13は細く整った整形痕をもち、胎土、焼成は良好で、他の塑形の口唇部が平らなのに對し、丸味をもつ。杯形(19~22)は糸切底が一般的であるが、21の底部は箝削りされ内面黒色である。22は内面から口唇部にかけて油とみる付着物が濃く付き、透明感とみられる。灰釉陶器に23の皿がある。内面にやや青味がかかった釉がたっぷり付くが、外面には釉はみられない。

らに掘り凹められ焼土
が厚く広がっている。
その状態からみてカマ
ドの上部が削除された
ものと思われる。

住居址内の北に寄っ
て径 2 m の円形の掘り
こみがあり、この中よ
り軒丸瓦 2 点をはじめ
布目瓦片が多量と須恵
器破片の出土をみて
いるが、その性格は把握
できなかった。住居址
の西に張出し部と並ん
で方形の低いロームマ
ウンドがみられたが、
その性格も不明であっ
た。

遺物(図23)に瓦が
多いのが注目される。
軒丸瓦に 3・4 があり、
2 はその復元図である。
4 は花弁と蓮子をそ
の間に 1 こずつ施し、
中心部に蓮子 1 こを付
け、周縁は上半部は二
重となり、その文様構
成は稚拙である。5 は
瓦とみると瓦塔の一
部とも思われる。

丸瓦に 6・8 があり
8 は薄手の須恵器とも
みられるもので、僅か
に細かい布目がみられ
る。6 は外面にハケ目
整形痕がみられる。平
瓦(7・9~13)の 7 は
ほぼ原形を知る唯一
のものであり、いずれ
も荒い布目をもち、外

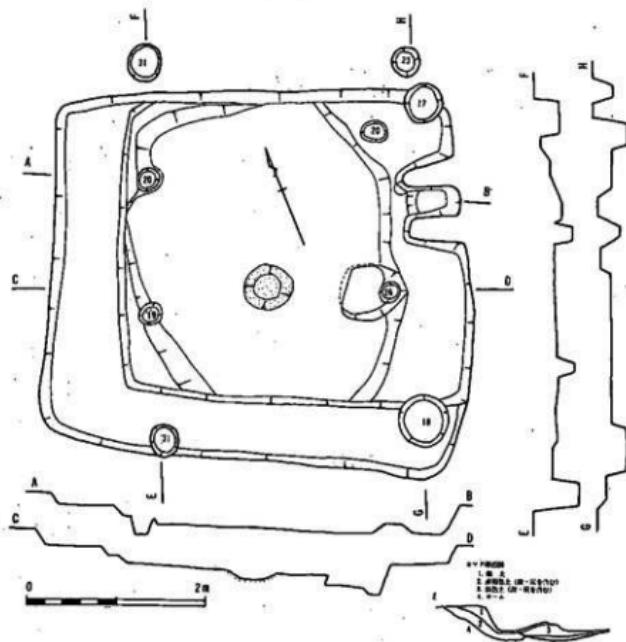


図7 御射山遺跡 3号住居址

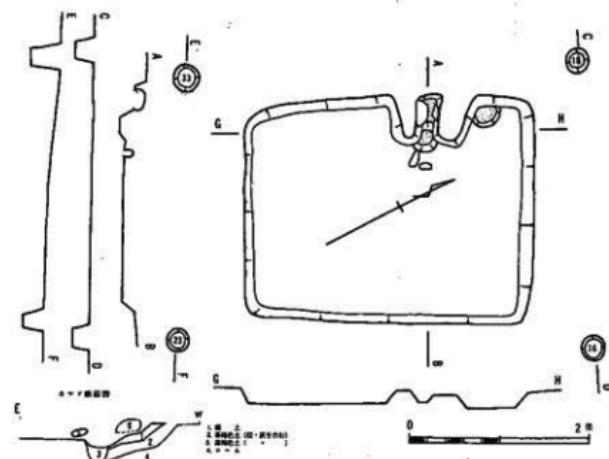


図8 御射山遺跡 4号住居址

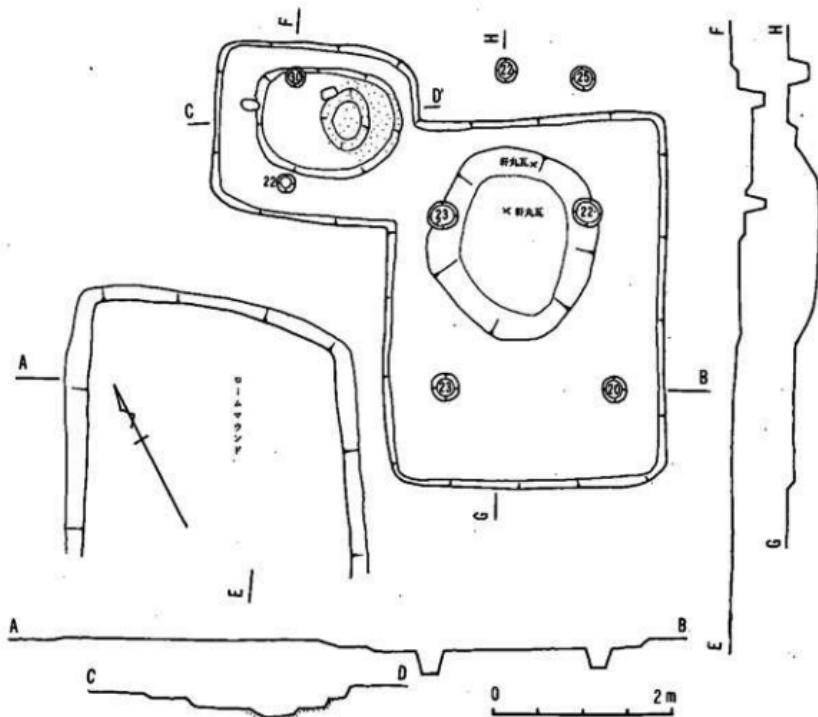


図9 御射山遺跡5号住居址

面に11にみるようタタキ目をもつものがある。須恵器には1の壺があり、胎土、焼成の良い美濃地方窯産である。14・15は器壁は厚く瓦ともみられるが、波状文が施され、胎土、焼成は良く大形壺の破片とみられる。図示以外に瓦片、須恵器、土師器の小片は多い。

7号住居址（図10）

東の道路に接して発見され、1辺が2.8m前後の隅丸方形の堅穴住居址とみるが、東は道路のため調査不能、西は建物址Vに接している。堅穴内部には柱穴、焼土ではなく独立した住居址というより、建物址V号の一部をなすものか、東につながるとみる建造物の一部とみられる。

遺物（図22の6・7）は少なく、6・7の瓦片があり、7は無文の平らなものであるが瓦とみたい。図示以外に須恵器、土師器、瓦の小片が数点と鉄鋸2点がある。

8号・9号住居址（図11）

調査区域の南西端に8号・9号が40cmの間をおき並んで発見された。8号は南北3.5m×東西4mの隅丸方形、9号は南北3.3m～3.6m×東西3.8mのやや不整形の堅穴住居址である。とも

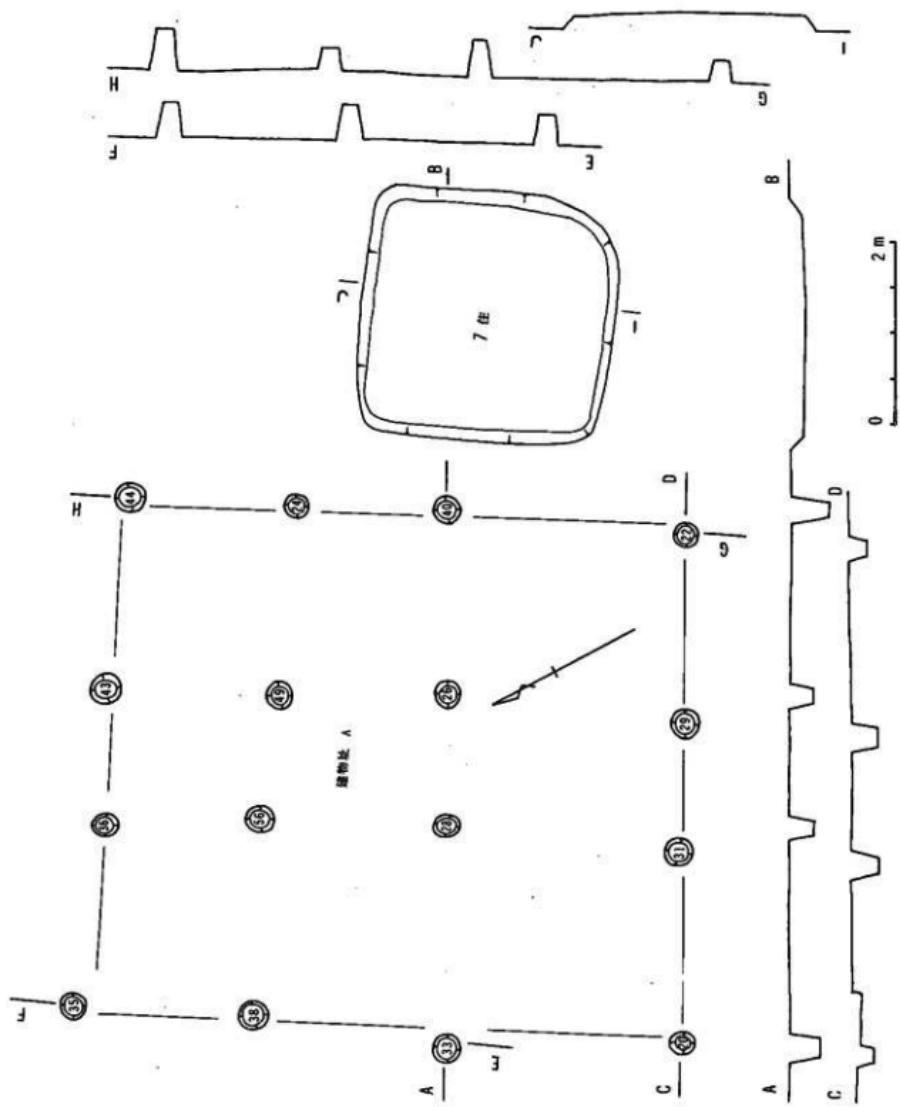


图10 双射山遗址7号居住址·建筑物V

に主柱穴4こが整った配置にある。カマドはなく住居址内に焼土もみられない。遺物は僅少で、須恵器、土師器の小片と、図22の8の磁石が8号住居址より出土している。

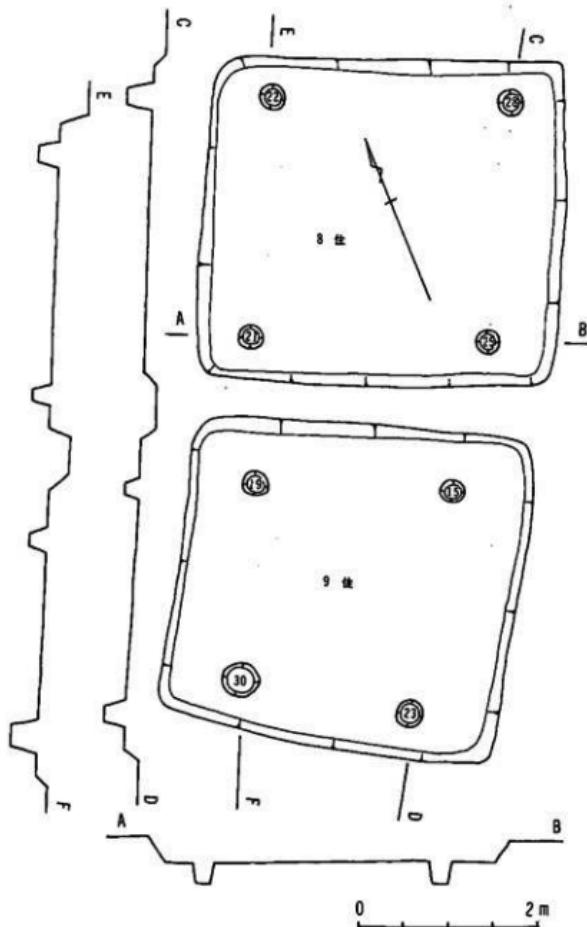


図11 御射山遺跡8号・9号住居址

3. 平安時代建物址

建物址I号(図12)

3号住居址の北に隣接し、2間×2間の掘立の建物址である。径65~80cmの大きな柱穴をもち、柱穴の間隔は東西方向で2.7m, 3.6m, 南北方向で2.7m, 1.8mとなるが、その配置は整っていない。遺物

(図24の1～4)は少なく、1・2の須恵器片の他に土師器の小片があり、布目瓦に3・4と他に小片数点がある。4は外面にタタキ目をもつ。

建物址Ⅱ (図13)

建物址Ⅰ号の北に隣接し、2間×3間の掘立の建物址である。柱穴は南東隅の径50cmを除き小さく、径20～30cm前後であり、柱穴の間隔は2～2.5mで、その配置は整っていない。

遺物は僅少で図示するものもなく、須恵器、土師器の小片をみたにすぎない。

建物址Ⅲ (図14)

3号住居址の南に隣接し、2間×4間の掘立の建物址である。柱穴は径30～40cm、比較的整った配置にあり、東西方向で2.4m、南北方向で北から1.8m、1m、1.4m、1.4mとなる。北東側の柱穴間に南北3.7m×東西2mの隅丸長方形に厚さ20～30cmに粘土が詰められ土壇状をなしている。

遺物(図22の9～18)には瓦が多く、10の軒丸瓦があり、9はその復元図である。5つの花弁の中心に蓮子1こをおくものとみられ、その文様構成は地方色をもつ、稚拙なものである。11は獸面の小形鬼瓦ともみられるものであるが、瓦塔の一部とみた方がよいかも知れない。丸瓦に14～16があり、16以外は布目

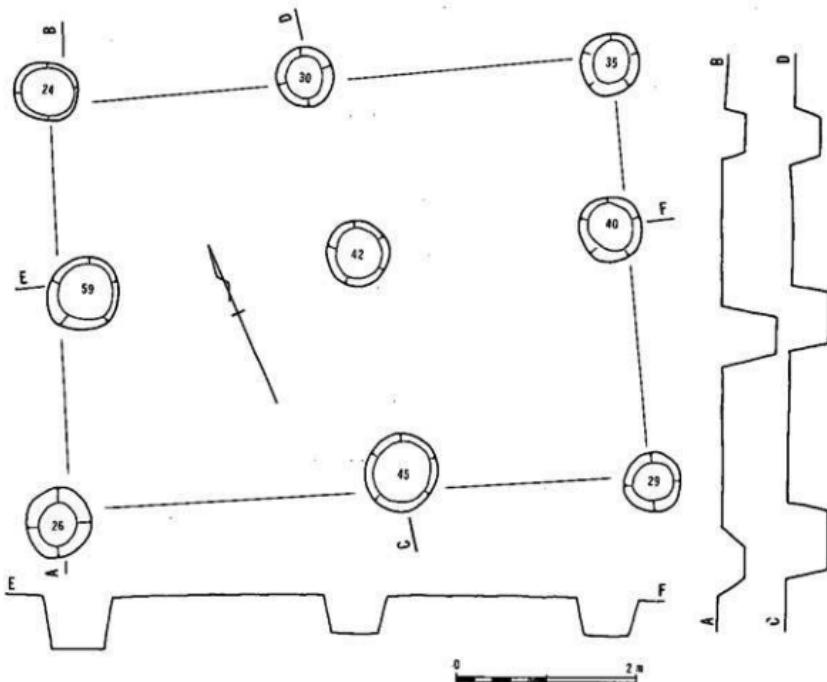


図12 御射山遺跡建物址I

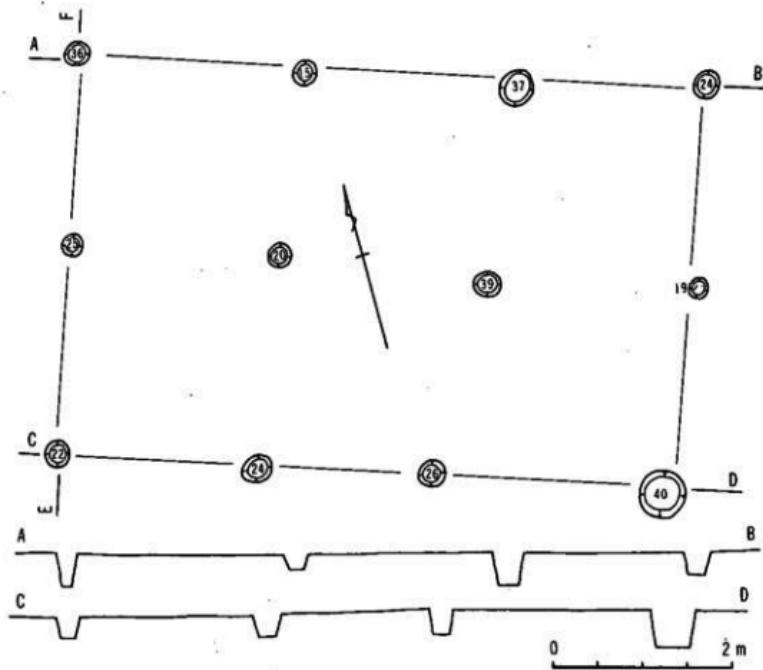


図13 御射山遺跡建物址Ⅱ

はなく、15は幅の狭い特殊な用途をもつものとみる。平瓦12・13・17・18は表面にタタキ目をもつ布目瓦であり、瓦は全体的に薄手である。図示以外に瓦の小片、須恵器、土師器の小破片が多い。

建物址IV号(図15)

2号住居址の北3m、東3.5mに建物址V号がある。2間×2間の掘立の建物址である。柱穴の大きさは径30cm前後、柱穴の間隔は1.5m、2.5mであるが、その配置は整っていない。

遺物は須恵器の小片を数点みたにすぎない。

建物址V号(図10)

7号住居址の西に隣接し、7号住居址がこの建物址の一部をなすものとみられる。3間×3間の掘立の建物址である。柱穴は径30cm前後、柱穴の間隔は2.7m、2m、1.5mとなるが、その配列はやや整いを欠く。遺物(図24の5・6)には5の丸瓦、6の平瓦があり、他に瓦の小片2点と土師器、須恵器の小破片がある。

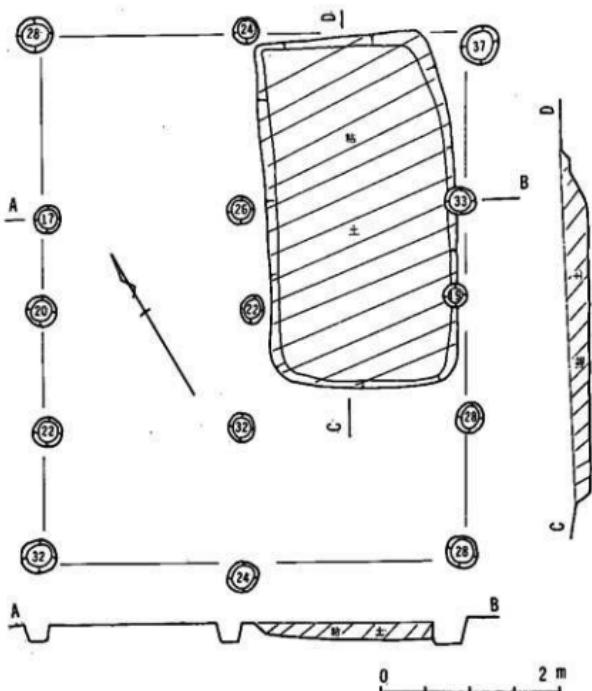


図14 御射山遺跡建物址III

建物址VI号（図16）

建物址VI号の南6m、VII号の南西5mにあり、2間×2間の掘立の建物址で、柱穴の大きさは35~50cm柱穴の間隔は1.8m、2.4m、2.7mとなるが、東列と西列では40cmの差があり、西に広くなっている。遺物（図24の7・8）は少なく、7・8の瓦の他須恵器片と灰釉陶器片1点の出土をみたにすぎない。

建物址VII号（図17）

建物址VII号の東3.5mにあり、2間×3間の掘立の建物址である。1.8m前後の柱穴間隔をもつが、北西隅はやや離れて配列をくずしている。柱穴は径50cm前後と大きく、また深い。

遺物は図示するものではなく、少ない。瓦と須恵器の小片数点の出土をみたのみである。

建物址I号（図18）

建物址I号の東2.5mにあり、1間×1間の掘立の建物址であり、柱穴間隔は2.7mであるが、北の東西列はやや狭くなる。柱穴は径50~60cmと大きく、1こを除き40~50cmと深い。

遺物（図24の9~11）には9の須恵器の杯の高台部、11の内面は木葉痕をもち、研磨され、外面は荒い肌をもつもので、土師器ではあるが器形は不明である。10は丸瓦、図示外に須恵器、土師器、瓦の小片が

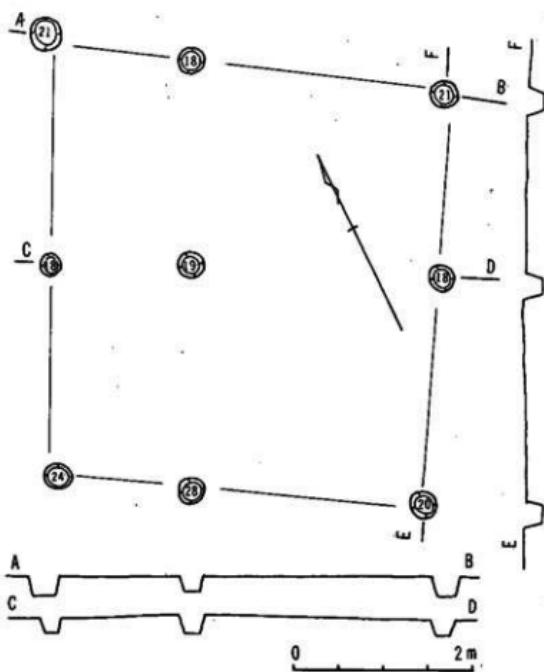


図15 御射山遺跡建物址IV

ある。

建物址IX号（図18）

南北方向に3つの1.5m間隔の柱穴が並び、東は道路となり調査不能。2間×何間かの東に続く掘立の建物址とみられる。南側の柱穴には明らかに土台石とみる石が据っている。

遺物は図示していないが、瓦と須恵器の小片がある。

4 中世住居址

6号住居址（図19）

5号住居址の西4mにあり、南北1.9m、東西2.6mの不整形な隅丸方形の竪穴をもち、その西と東に1.8mと1.6mの間隔をもつ柱穴が3つずつ並ぶ。遺物には中世陶器片10数点で、小片のみ。古瀬戸片、

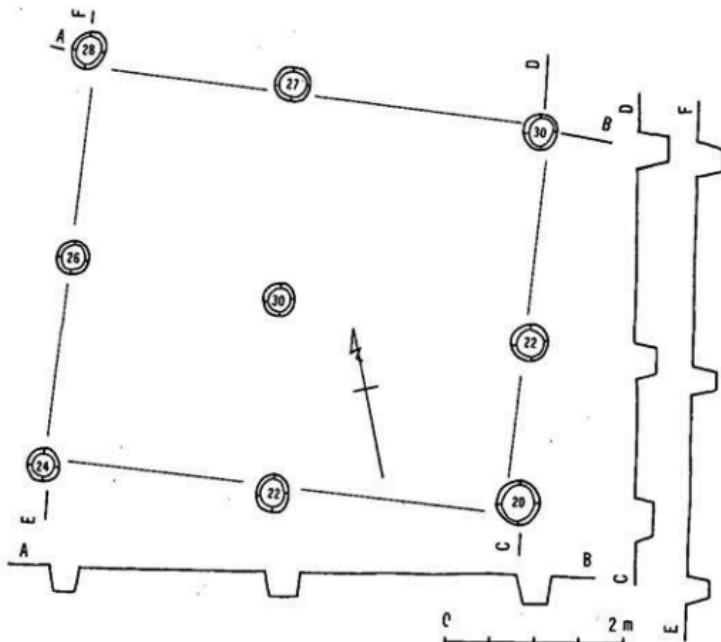


図16 御射山遺跡建物址VI

スリ鉢片、山茶碗片がある。

5. 土 塚

土塚1号(図20)

建物址IVの北5mにあり、南北120cm×東西100cmの楕円形、深さ20cm、主軸方向N3°Eをはかる。遺物には平安期の須恵器、土師器の小片の出土をみているが、その時期ははっきりいえない。

土塚2号(図20)

建物址IV号とV号の間にあり、150cm×105cmの楕円形をなし、南と東側の壁に石が不規則に並ぶ。深さ25cm、主軸方向N 46°Wをさす。

遺物(図25の7~9)には、7の大形打石斧、8の小形打石斧と10の横刃形石器の出土をみ、縄文時代中期の土塚とみる。

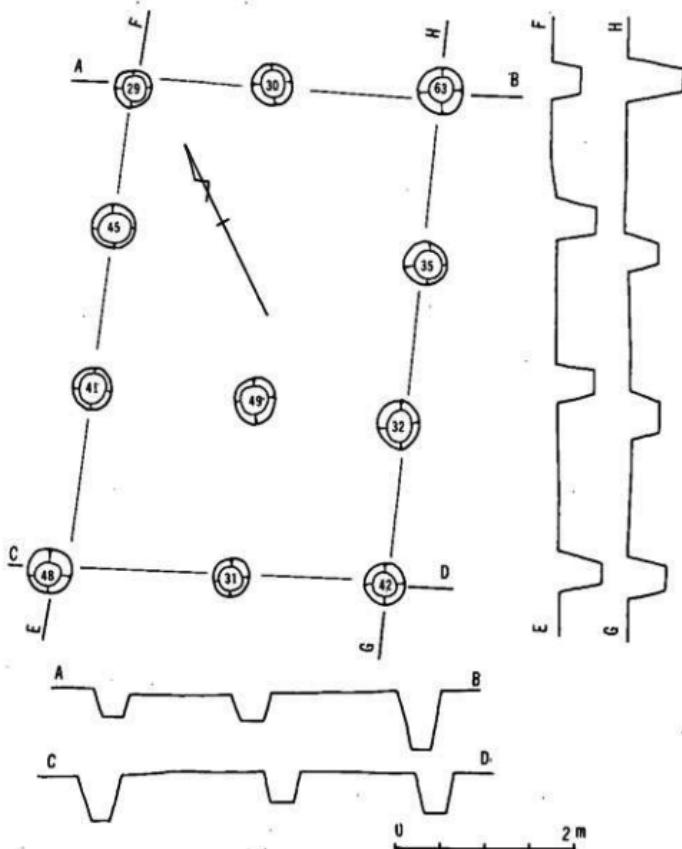


図17 御射山遺跡建物址VII

土塁3号（図18）

用地内の北東に発見され、建物址VIIの東2mにある。80cm×120cm、深さ55cmの楕円形をなし、主軸方向N 60° Wをさし、最大径60cmの大石が斜めに土塁内に入りこんでいる。おそらく蓋石であるとみられる遺物は図25の10の鉄釘が北壁について出土している。平安時代の土塁とみられる。

土塁4号（図18）

建物址IXの西90cmにあり、112cm×78cmの楕円形、深さ39cm、主軸方向N 60° Eをはかる。遺物はなく、その時期は不明である。

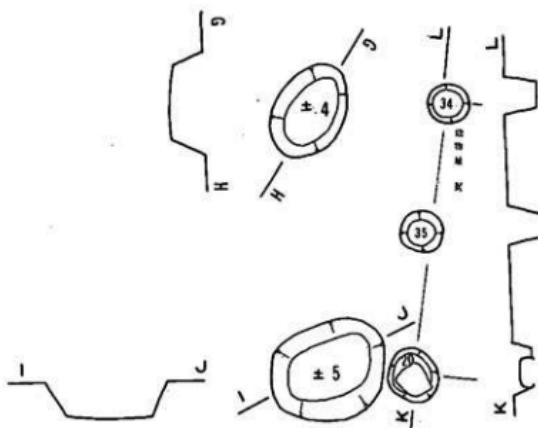
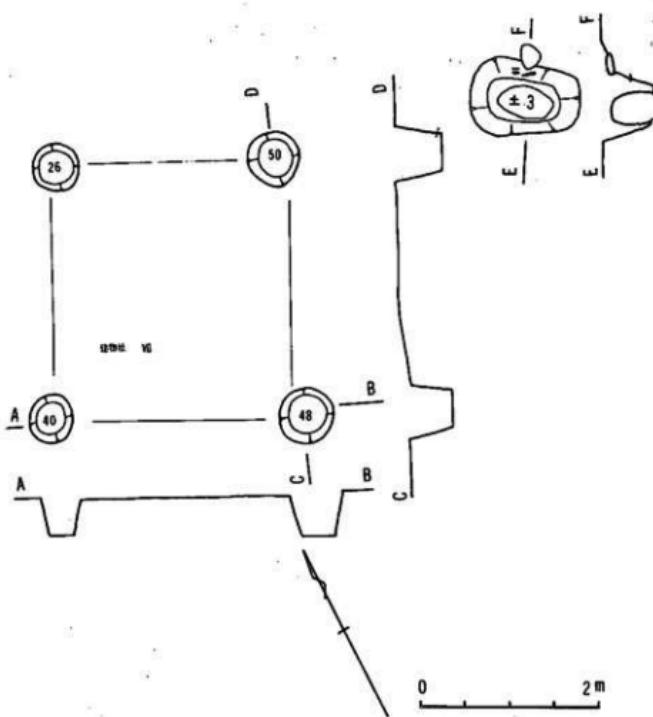


图18 御射山遺跡建物址Ⅸ・IX, 土塙 3号・4号・5号

土塙5号(図18)
建物址IXの南の柱穴
の西40cmにあり、118
cm×126cmの楕円形、
深さ40cm、主軸方向N
90° Wをはかる。遺物
はなく、その時期は不
明である。

6. その他遺構外 の遺物

図25の11～15の縄文
中期とみる打石斧、石
錐、石鎌が調査区域内
より発見されており、
縄文中期の1号住居址
の存在からみて、この
期の遺構が用地外の南
東側にあるものと予想
される。用地外の東の
畠よりは、平安期の須
恵器、土師器の小片は
多く、瓦片も表採され
ており、中世陶器片も
みられた。

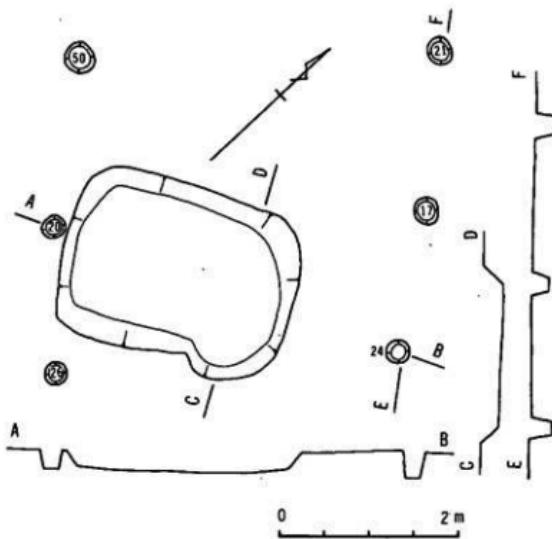


図19 御射山遺跡6号住居址

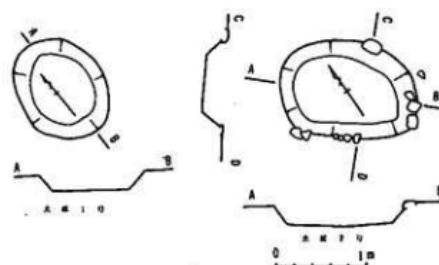


図20 御射山遺跡土塙1号・2号

IV 考 察

御射山遺跡における発掘調査は、用地外となる東側の南北方向の道路を境にした西側用地内の東2分の1について行なったものである。用地内の西側は、やや低地となり雨が降れば水が溜る状態で、遺構はなくなる。用地内の東側から用地境界にかけて遺構は集中して発見され、さらに用地外の東の畑に展開しているものと推定された。

繩文中期と中世住居址各1を調査し、またそれら時期の遺物も検出されているが、本遺跡の中心をなすものは平安時代における一連の建造物群である。この期の堅穴住居址7と掘立の建物址9が調査され、これら遺構より量的に相違はあっても平安時代の布目瓦の出土をみている。このため本遺跡の調査結果の焦点を平安時代においてみたい。

平安時代住居址にカマドを持たぬ2号・7号・8号・9号住居址があり、これらには、また焼土もみられない。7号址を除き堅穴住居址の形態を備えているが、カマドを持たぬ点に住居址といえるかの疑問がもたれる。これら住居址内より、数は少ないとせよ瓦の出土をみており、建物址と方向を同じにする2群があることに注目される。

建物址はいずれも掘立柱であり、その配列は整っていないものが多い。東南東に向くが、主軸方向をS 60° EとS 70° Eを指す2群に分かれ。前者—I群には建物址I・III・IV・V・VI・VII・IX号があり、後者—II群には、II・VI号があり、II群と同方向をなす住居址に3号址があり、他はI群と同方向をもつ住居址である。この方向性からみて二時期にわたる建造物群があったとみられる。

しかし、出土遺物からみて大きな差違はみられない。最も多くの遺物の出土をみたII群に属すとみる3号住居址の土師器の杯の大部分は糸切底であり、高台をもつ杯もみられる。灰釉陶器には外面に釉のかからない皿があり、須恵器は良質な美濃地方窯産と胎土に長石粒を多く含み、仕上りの良くない当地方窯産がほぼ同比率で出土している。

I群の住居址よりの出土は、土師器は小片のみであり、須恵器は4号住居址の杯と、5号住居址の壺の口縁部以外は小片である。それら須恵器は当地方窯産とみるものは僅かで、良質な美濃地方窯産が主となっている。この出土量の少ないものをもって時間的な差を測るには資料不足であるが、I群よりは灰釉陶器の出土をみない。杯の形からみてやや古い要素をもつものとみられる。

瓦は住居址、建物址のいずれからその出土量の多少はあっても出土をみている。瓦には大型で厚手のものと、小型で薄手のものがある。丸瓦には薄手が多く、一見須恵器ともみられる焼成の良いものがありまた土師器ともみられる薄手の平瓦もある。軒丸瓦は4点の出土をみ、2種類がある。5号住居址出土の花弁4と、その間に蓮子1こずつを、中房内に1つの蓮子をもつものと、建物址III号出土の5つの花弁を配し、中心に蓮子1こをおくとみるものがある。いずれもその文様構成は稚拙であり、地方色に富むものである。

建物址直号・5号住居址出土の獸面の小形鬼瓦ともみるものであるが、瓦塔の一部とみた方がよいかもしない。3号住居址出土の有孔の瓦も、瓦塔の一部ともみられ、今後の検討に俟つものである。

I・II群の建造物の配列は、一応2時期にわたるものと考えられるが、平安期布目瓦の出土とともにカマドをもたぬ竪穴住居址があり、掘立の建物址との配置は、平安時代における集落址の形態とは異している。建物址は一般的に倉庫址とみられるが、I号の柱穴の大きさ、III号の土壇とみる粘土によるタタキ面は、単なる倉庫址とみるより、特殊な建造物とみられる。

用地の東側の墓地(図2)付近にオコンドウと呼ばれる地名が残っている。オコンドウは御金堂である。金堂の存在していたことを示す地名といえよう。文献には寺院の存在はないが、瓦の出土と遺構配列よりみて寺院址とみるが妥当と思われる。

松尾地区は飯田下伊那地方で弥生時代から古墳時代にかけて最も早く開けたところであり、竜丘地区とならんで古墳密度の最も高い地域である。毛賀沢川を隔てた同位段丘面の駄科北平遺跡では平安時代の集落址が、また東の天竜川に接する冲積段丘面の清水遺跡でも平安時代の集落址が発掘調査されている。緑ヶ丘中学のある段丘面での塚越をはじめとする遺跡群は農業構造改善事業によって未調査のまま破壊されたが、この跡より平安時代の遺物が多く発見され、この期の集落の存在も確かめられている。御射山から見下す一帯に平安時代の遺跡は多くみられ、ここに寺院が建立されていたことも地形的に否めない場所である。

今後、用地外の東側一帯の畠は寺院址の存在を確認するための重要な地籍として注意しなくてはならない。

細文中期の住居址は1軒の調査であったが、この期の遺物は現在飯田三協工場のある浜井場遺跡より多く発見されており、未調査のまま工場建設がなされたことが惜しまれる。

中世住居址も1軒の調査であるが、南東の用地外の畠よりは中世陶器片が表記されており、西の上位段丘面の南の原遺跡では三菱電機工場建設に伴う調査では松尾城跡に関連する小笠原氏の有力家臣の星敷跡とそれに伴う薬研堀・櫓列・住居址・墓拝群が発見されており、御射山での今次調査地域外に松尾城跡に関連する遺構の存在も予想される。

注1 飯田市教委 「駄科北平遺跡」 1976

2 天竜上流工事事務所・飯田市教委 「清水遺跡」 1976

3 三菱電機KK・飯田市教委 「松尾南の原遺跡発掘調査報告」 1972・1974

おわりに今次調査にあたって丸一長野中央市場の御理解、調査員今村正次先生の献身的な御協力、大沢和夫先生、県文化課の今村善興指導主事、岡田正彦先生の御指導・助言があり、作業にあたられた方々の熱心な作業態度が大きな力となったことを深謝したい。

調査組織

1. 御射山遺跡埋蔵文化財発掘調査委員会

平田 英夫	飯田市教育委員会委員長
橋本 玄進	前 "
林 研二	飯田市教育長
森本 信也	前 "
勝野 好一	飯田市教育委員
沢柳 俊夫	"
大田中 一郎	"
相津 実	飯田市教育委員会事務局 社会教育課長

2. 調査団

団長	佐藤 駿信
調査員	今村 正次

3. 指導者

大沢 和夫	飯田女子短大教授
今村 善興	長野県教育委員会文化課指導主事

4. 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

相津 実	社会教育課長
山下 爭平	課長補佐
木下 章治	係長
木下 一彦	係長
林 茂喜	主事
林 貞子	主事
熊谷 里恵子	主事

5. 作業員

福島 明夫	北村 重実	木下 喜一	遠山 一夫
西尾 多三郎	三石 国男	木下 伍一	小島 若一
熊谷 三男	竹内 正明	吉川 文男	下平 しづみ
牧内 住子	菱田 悅子	久保田 裕二	宮内 伝
佐藤 いなゑ	田口 さなゑ	池田 弘美	中平 一夫

お わ り に

飯田市松尾毛賀地籍に、株式会社長野中央市場の倉庫及配達センターが建設されることになったとの連絡を受けたので、建設予定地が遺跡登録3728の埋文包藏地であることと、事前に県文化課今村善興先生と調査団長の佐藤駿信先生をお願いして現地調査を行い確認したうえで、株式会社長野中央市場に工事着手前に発掘調査記録保存事業を実施しなければならない旨お願いしたところ、早速費用負担等心よく承諾されましたので事前に発掘作業を実施することにした。

御射山遺跡は毛賀の上段に位置し近くには御射山の森もあり古くから信仰的であったといわれているところである。

今回の事業は昭和51年度と52年度の2ヶ年にわたり、51年度は現場の発掘調査を実施し整理報告書の発行は52年度事業とし、事業費は全額工事主体である長野中央市場から飯田市が委託事業として受け主管である飯田市教育委員会の直轄事業として行いましたが、その間会社関係者の深い理解と協力があって、この埋蔵文化財発掘調査記録保存事業が大きな成果を残して完了しました。

調査体制は、団長に佐藤駿信先生、調査員に今村正次先生をお願いし、先生方の経験豊かな知識をもって終始献身的な協力と指導者の飯田女子短大大沢和夫先生、県教育委員会文化課指導主事、今村善興先生の適切な助言をいただき、出土品の整理復元、遺構図の整理、報告書の執筆は団長の佐藤先生が終始熱意をもってとりくまれてここに完了したことに対し深く敬意を表します。

昭和53年3月

飯田市教育委員会

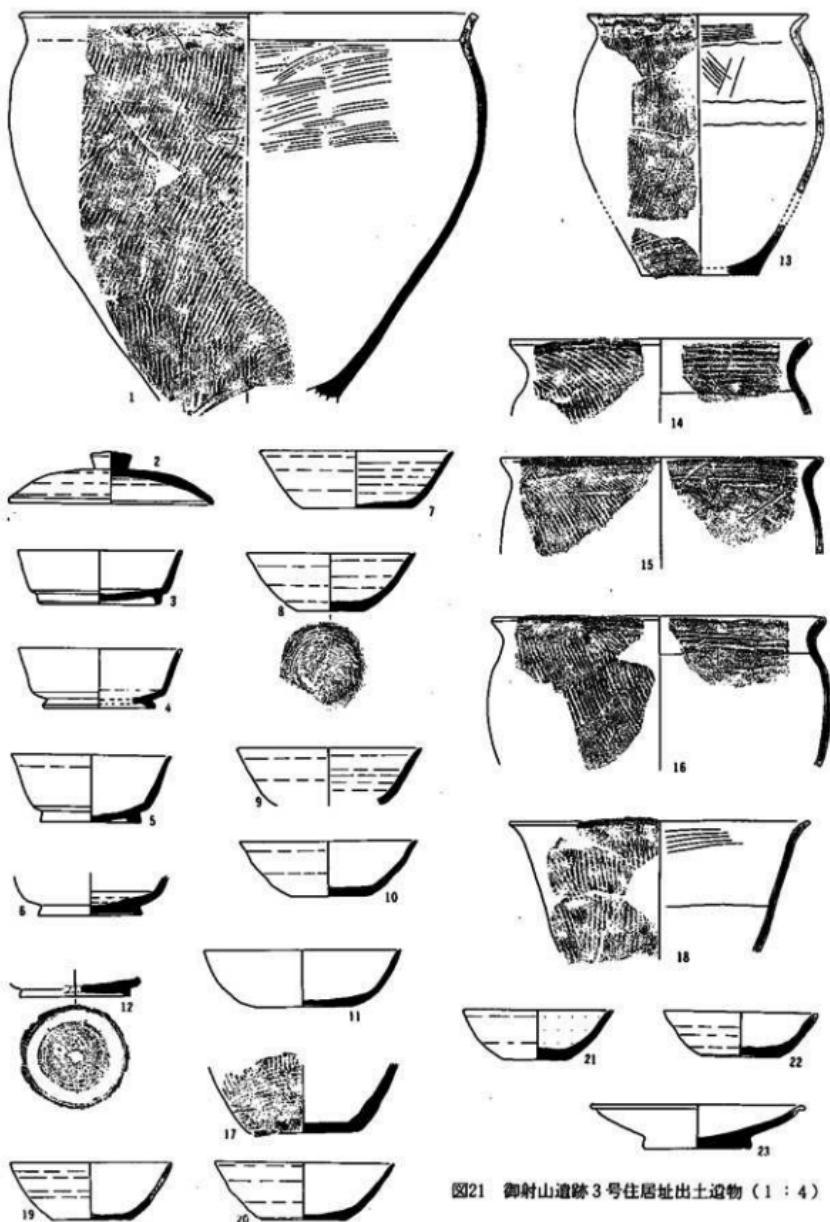


图21 御射山遗址3号住居址出土遗物（1：4）

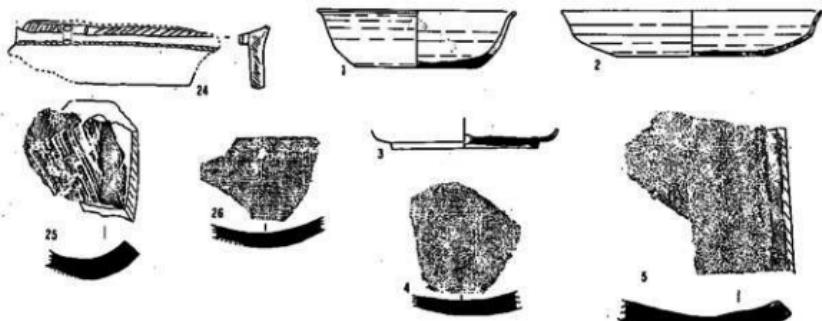


図21の2 御射山遺跡3号住居址出土遺物(1:4)

(24~26)



(1~5…4住, 6~7…7住, 8~8住, 9~18…建物址)

図22 御射山遺跡4号・7号・8号住居址、建物址III号出土遺物(1:4)

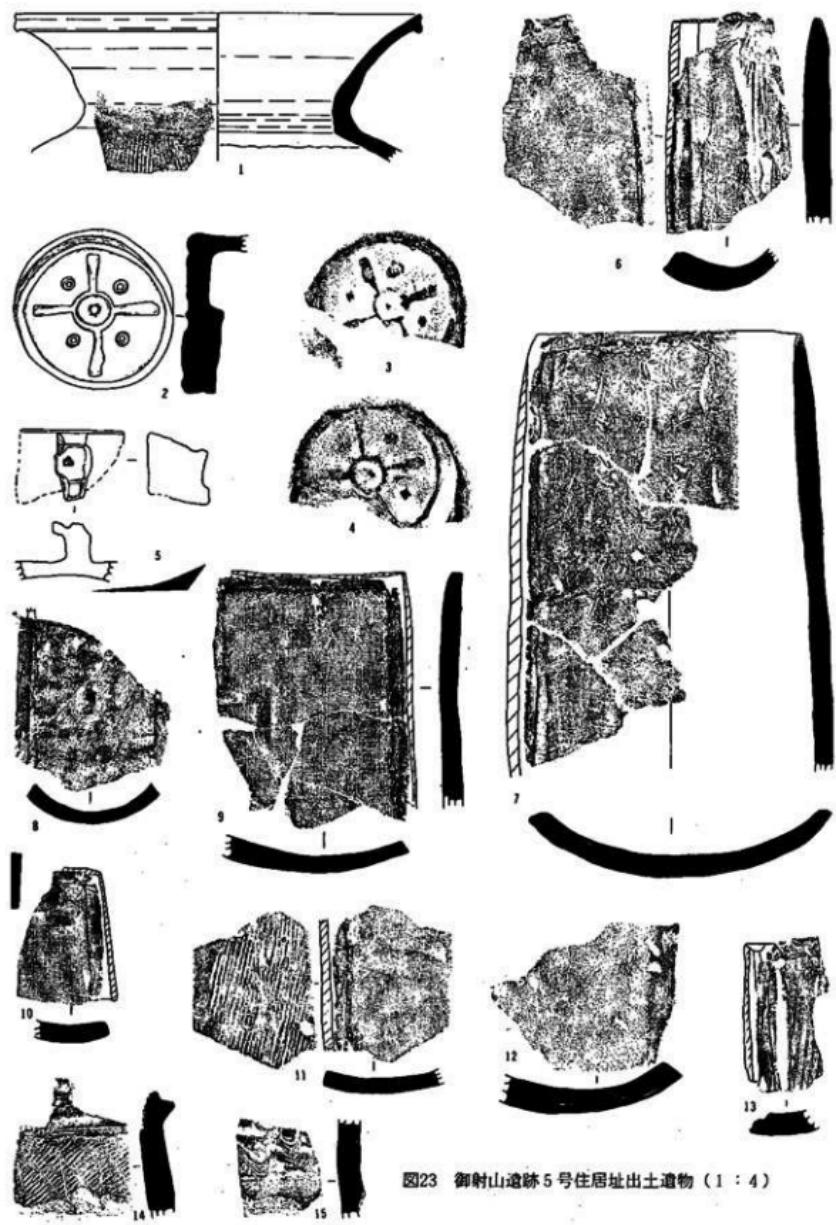


图23 御射山遗址5号住居址出土遗物 (1 : 4)

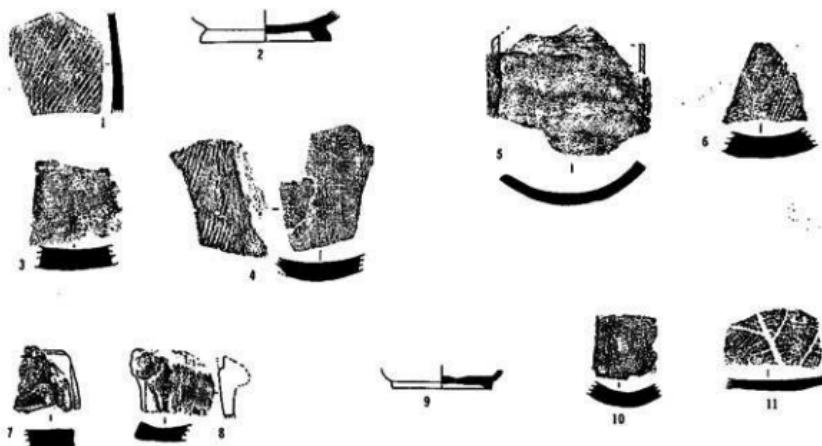


图24 御射山遗址建物址I号·V号·VI号·罐号出土遗物 (1 : 4)

(1~4…建物址I, 5·6…建物址V, 7·8…建物址VI, 9~11…建物址罐)

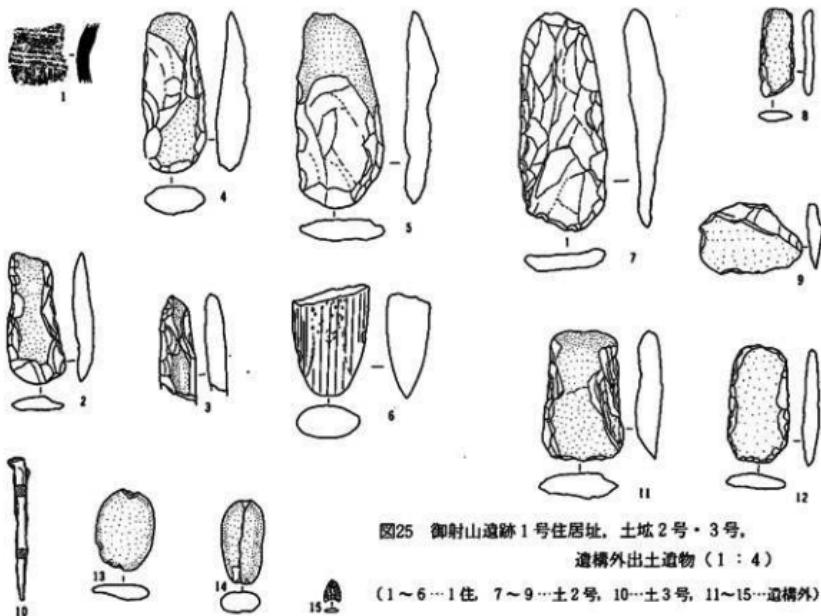


图25 御射山遗址1号住居址, 土坡2号·3号,

造模外出土遗物 (1 : 4)

(1~6…1住, 7~9…土2号, 10…土3号, 11~15…造模外)

図版 L 遺 跡



西から



南西から



遺跡遠景 — \印が遺跡



南から



東から

図版2 遺構群



北からみた遺構群



中央部から北の遺構群



南からみた遺構全景

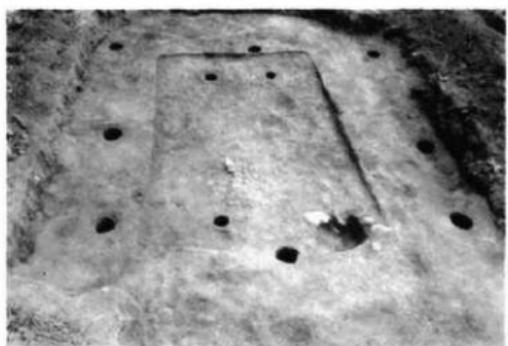


西からみた南側の遺構群



東からみた南側の遺構群

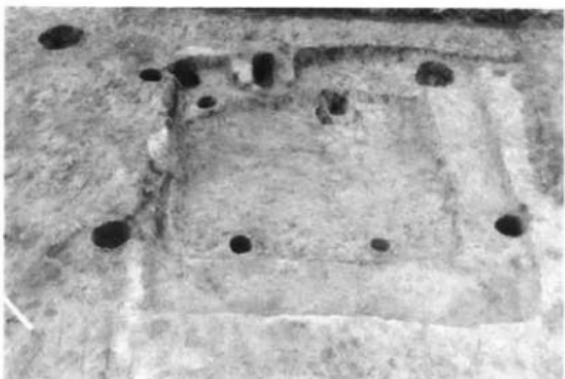
図版3. 平安時代の遺構



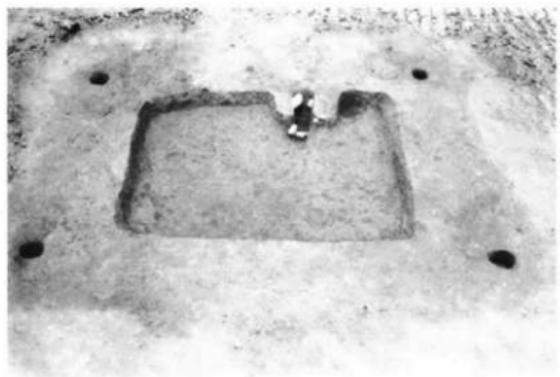
2号住居址



3号住居址カマド



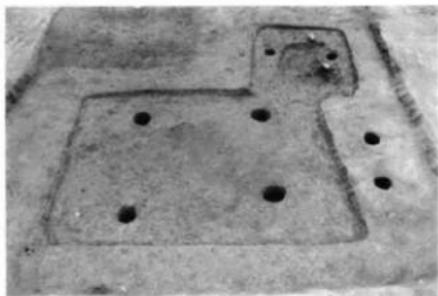
3号住居址



4号住居址



4号住居址カマド



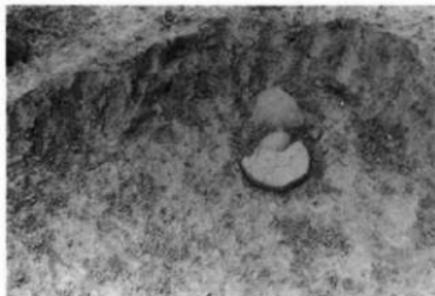
5号住居址1



5号住居址2



5号住居址内の掘りこみ — 瓦を多量に出土する



5号住居址内掘りこみより軒丸瓦出土



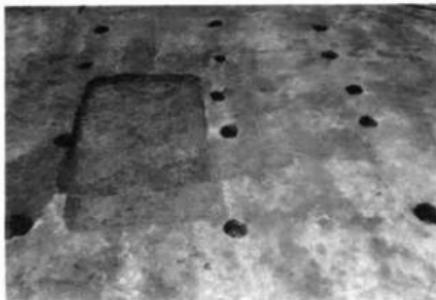
7号住居址



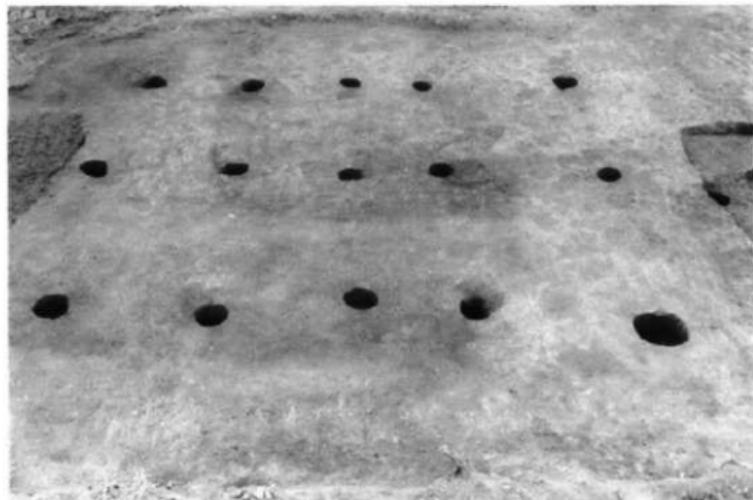
8号(右)・9号(左)住居址



建物址Ⅲ号の土壤状に粘土が詰められる — 白い部分



建物址Ⅲ号 — 粘土部の調査後



建物址Ⅲ号



建物址Ⅲ号 — 軒丸瓦出土



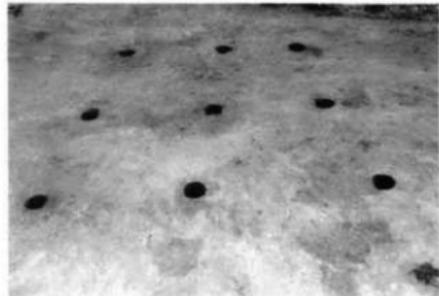
26. 建物址Ⅲ号 — 軒丸瓦出土



建物址Ⅰ号



建物址Ⅱ号



建物址Ⅳ号



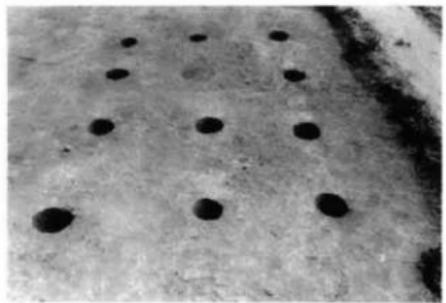
建物址Ⅵ号



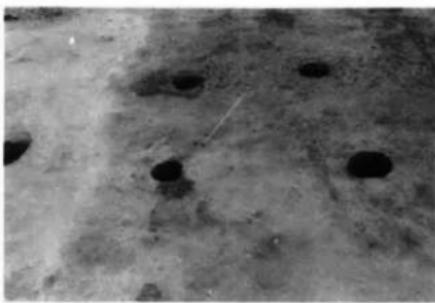
建物址Ⅴ号と7号住居址



建物址Ⅴ号と7号・2号住居址 — 北より



33. 建物址Ⅷ号



34. 建物址Ⅷ号



建物址IX号と土塙4号（左前）・土塙5号（右前）

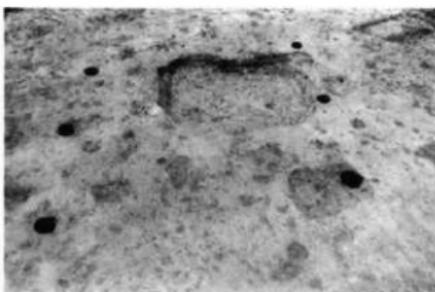


建物址IX号の南柱穴内の土台石

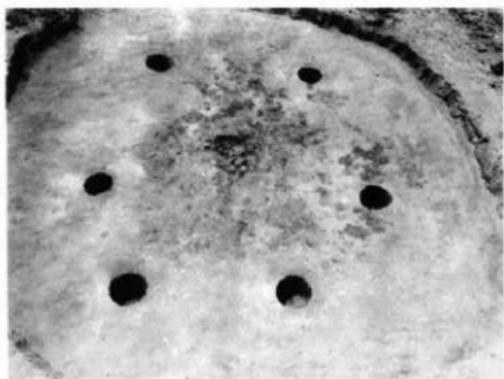
図版4 繩文中期、中世の遺構



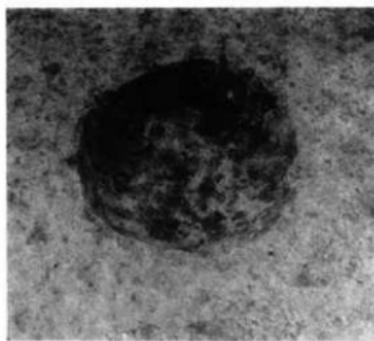
土塙3号



6号住居址（中世）



1号住居址（縄文中期）—壁は削りとられている



1号住居址の炉址

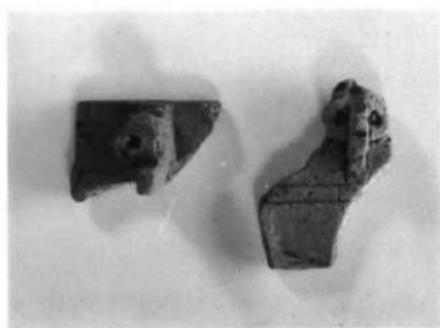
図版5. 遺 物



軒丸瓦（建物址Ⅲ）



軒丸瓦（5号住居址）



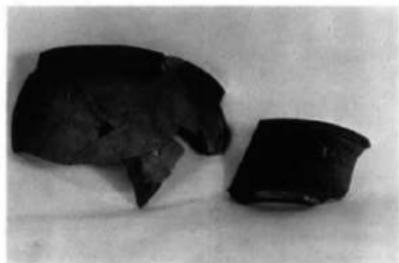
43. 瓦塔の一部？ 獣面の小形鬼瓦？
(右建物址Ⅲ, 左5号住居址)



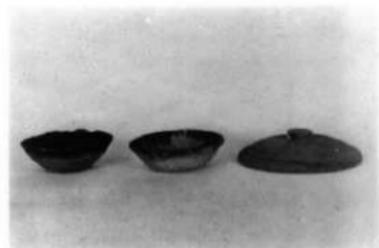
瓦とその他
左上は瓦塔の一部? 左下は須恵器の杯底部
に穴をあけ蓋にしている。右は平瓦の布目と
外縁のタキ目



平瓦（5号住居址）

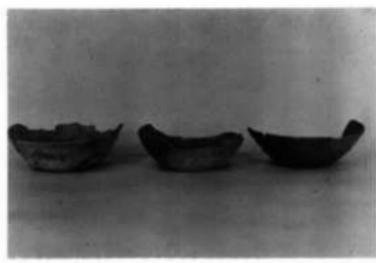


須恵器甕（左3号、右5号住居址）



3号住居址出土の杯と杯蓋

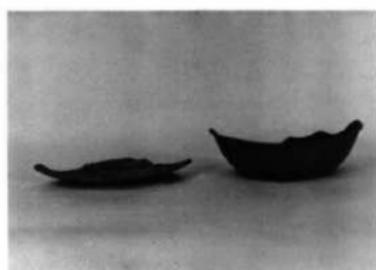
左は両面黒色、中は油のこびつき



3号住居址出土の杯（左2点は生やけの須恵器）



丸瓦と平瓦（5号住居址）—左丸瓦



4号住居址出土の杯（右）、皿（左）

図版6. 発掘スナップ



調査にかかる



1号住居址の検出



調査はすすむ一 建物址IV号の検出



調査はすすむ一 3号住居址の東へ調査を広める



調査はすすむ一建物址V号の検出



調査を終える。

毛賀御射山遺跡

1978. 3

発行 株式会社 長野中央市場
長野県飯田市教育委員会

印刷 株式会社 秀文社

